

よりそう

高齢社会2015年への備え

①

木村龍登さん(20)は「『楽しかった』と言われ、やって良かったと感じた。就職したら入居者の心に寄り添うケアをしたい」と目を輝かす。

■理解深める研修

日本の高齢者は団塊の世代が65歳以上になって急増する2015年以降も増え、ピークは30年に迎える見通し。プロの介護職の需要もますます大きくなるが、現状は「介護職は新3K職場―きつい、汚い、給料が安い」と言われ、1年間に辞めた人の割合を示す「離職率」も約18%と他職種に比べても高い。専門性や経験の蓄積が大切な仕事だけに、担い手の育成を重視し、さまざまな工夫を凝らす学校や介護現場も出始めている。

(上田貴子)

担い手を育てる

実践するミニデイ。何度か参加している酒田カツ子さん(78)は「知らないことを教え

札幌市清田区で特別養護老人ホームやデイサービスなどの介護施設を集積する「アンデルセン福祉村」。運営するノテ福祉会は今春、組織内に教育・研修室を新設した。介助の基礎を教える既存の採用時研修に加え、入社3カ月、9カ月でも職員を集める。山谷里希子室長は「介護は肉体、頭脳、精神を使うプロの

喜ぶ笑顔をやりがいいに

プロの誇り伝える工夫

お年寄り「昔はうちの近くにススキがたくさんあったのよ」

学生「きれいだったでしょうね」

札幌福祉専門学校(札幌市東区北5東8)独自のミニデイサービス。ススキを使ってクリスマス飾りを作る近所のお年寄りが、学生と会話を弾ませた。

■学生が企画運営

介護福祉学科(136人)の学生は2年間で介護の専門知識を学び、特別養護老人ホームやグループホームで実習もする。ミニデイは「どうしたらお年寄りの気持ちに近づけるか」の集大成として、2年生が企画・運営する。

校内にしつらえた一般住宅のような居間で11、12月に計12回、町内会や老人クラブを通じて5人ずつお年寄りを招く。手足を動かすゲームや手芸をするほか、手作りのおやつも振る舞う。



札幌福祉専門学校のミニデイサービスでクリスマスの飾りを作る近所のお年寄り。学生が考えたレクリエーションだ

学生は半年がかりの準備の過程で、時に涙を流すほど、ぶつかり合う。真剣に考えて

中村

仕事。理論を学ぶことで質を高め、職員の誇りにつなげた。豊平区内の関連施設で12月初めに行った9カ月目研修には、特養で働く介護職員ら11人が参加。半身まひがある人が負担を感じない入浴介助、認知症の人の気持ちを考えたコミュニケーションの取り方などを、1日かけて互いに話し合い、実技を練習した。ヘルパーの秋元早知美さん(31)は「なにげない動作を自分で理解することで、自信を持って介助ができる」と、納得した表情を見せた。

■復帰で人材確保

札幌市内で特養を運営する社会福祉法人ほくろ福祉協会は11月、介護福祉士やホームヘルパーの有資格者を対象に、「復職講習会」を初めて開いた。

子育てや仕事に対する不満を抱え、介護の現場を離れた人の背中を押すためだ。